

# 海 (かいし) 市

No. 30

## ● 詩

- 02 横山 仁 生活の柄 (24)  
04 前田 勉 ささめき  
06 〃 晩夏のために (7)

## ● エッセイ

- 08 細部俊作 「旅をする木」を読んだ  
12 佐藤ただし 水田とツバメ (28)  
17 横山 仁 雑記 (30)

## ● コラム

- 15 前田 勉 ブログ「陽だまりの中のなか」より

生活の柄(24)

横山 仁

二階から降りると

洗濯機が廻っていて

老母が

廊下をモップで掃除している

(死んだことを)

忘れているのだろうか)

とさめき

前田 勉

霜の降りた朝

ぷしおん

ぼしおん

と

遠い昔に聞いた

おどけたような音が

地温に添って

大気へはじけてゆく

まるで

あどけない子どもたちの

まあるい口もとから漏れる

やわらかく心地よい  
ささめき

のよう  
に

ふくよかに

音と

静けさが

朝にとけこみ始めるまでの

限られた時間

聴こえる人にだけ

発信されて

## 晩夏のために（7）

前田 勉

窓から見えるアスファルト上で  
過ぎてゆく季節の端に絡みついた  
陽炎かげろうが揺れている

あること

と

ないこと

の

あいまいな線上で

ときに

耳閉感の波長に同調しながら

意味あるように

ゆらり

遅れたものたちとともに  
燃えようとしている

## 「旅をする木」（星野道夫）を読んだ

細部 俊作

星野道夫（一九五二—一九九六）が動物写真家であることは知っていたし、彼の撮ったシロクマの家族の写真を見たこともあった。その後、撮影先でクマに襲われて落命したことは何かで知った。その彼の本を、数年前本屋で見つけたとき、写真はなく文章だけだったのが意外で、写真家がどのようなことを書くのだろうかと、それだけで買ひ、そのまま積読にしていたのを読み始めたのだった。（文春文庫 一九九九年刊）

星野道夫が生きたアラスカに関する知識はほとんどなかった。エスキモー、犬ぞり、北極海に接する極寒の地、オーロラといった単語が出てくる程度だった。ネットで調べると人口七十三万人で人口密度一平方km当

たり〇・五人。人種構成では白人六四％、アメリカインディアン・アラスカ先住民一五％弱、その他。星野道夫の留学先の大学は内陸部のフェアバンクスという町にあり、その冬の気温はマイナス摂氏五一度以下にまで下がる。夏は温かく三〇度台前半から半ばというから意外だった。道路網はアメリカ国内と比べてほとんどがつながっておらず、移動は飛行機や船舶が主だという。星野がよく書いている動物は、群れて千kmも季節移動することで強く惹かれてくるカリブー（トナカイ）、巨体のムース（ヘラジカ）やハイイログマ（グリズリー）、オオカミ、クジラなど。

アラスカは日本と対比させる気持ち起きないほど遠い地域と感じていたが、ちょっと近いかなと思っただのは次の部分。九月には「ブルーベリーや克蘭ペリーの実が熟し、渡り鳥は南への長い旅のため、クマは長い冬ごもりのため、その実をせっせと食べて脂肪を蓄えます」という件にさしかかったとき、ブルーベリーは日本では主に七、八月が収穫期だが、向こうではひと月遅れなのかと分かったり、日本で越冬する白鳥が

シベリア方面から来るように、北緯がほぼ同じアラスカからだつて極寒を避けて南へ渡つていく鳥はいるのだと気づかされた。また、フェアバンクスでは夏に菜園をやっている家が多い、とも記されていて驚いたが、夏は三〇度台の気温だというからと納得。その菜園に大きなムースがつまみ食いにやつてくるという。こちらではカモシカが来る、クマも来る。

・一年に一度、名残惜しく過ぎてゆくものに、この世で何度めぐり合えるのか。その回数をかぞえるほど、人の一生の短さを知ることはないのかもかもしれません。

赤や黄ではなやいだ秋が過ぎようというとき、来年までこの景色をみることができないという惜別の念がわいてくる。それは四十代はじめのころの星野も同じだったかとどこか近しさを感じた。

・カリブーの仔どもが寒風吹きすさぶ雪原で産み落とされるのも、一羽のベニヒワがマイナス五〇度の寒気の中でさえずるのも、そこに生命のもつ強さを感じます。けれども、自然はいつも、強さの

裏に脆さを秘めています。そしてぼくが魅かれるのは、自然や生命のもつその脆さの方です。日々生きていくということは、あたりまえのことではなくて、実は奇跡的なことのような気がします。これがこの本の中で最もひびいてきた部分だった。続けて……

・その脆さの中で私たちは生きている。言いかえれば、ある限界の中で人間は生かされている。

動植物の個体がみせてくれる生存していることの奇跡。それは時を超えてくり返されてきた。一方で星野は、アラスカ北部沿岸での石油開発が動植物に影響を与えることを心配していた。それはいま、どうなっているのだろうか。

読み進めていると「もう一つの時間」という言葉は何度か目にする。

・ぼくたちが毎日を生きている同じ瞬間、もうひとつの時間が、確実に、ゆったりと流れている。日々の暮らしの中で、心の片隅にそのことを意識できるかどうか、それは、天と地の差ほど大きい。

・（自分が過ごしている同じ時間に）見知らぬ人々が、ぼくの知らない人生を送っている不思議さ。  
・見知らぬ遙かな土地、そこに生きる私たちとは違う価値観をもった人々、人間の知恵をもつてさえどうすることもできない自然の力……そんな世界をいつか見に行くのだという漠然とした夢。

また、次のような印象深い文章があった。

・頬を撫でる極北の風の感触、夏のツンドラの甘い匂い、白夜の淡い光、見過ごしそうな小さなワスレナグサのたたずまい……ふと立ち止まり、少し気持ちを含めて、五感の記憶の中にそんな風景を残してゆきたい。何も生み出すことのない、ただ流れてゆく時を、大切にしたい。あわただしい、人間の営みと並行して、もうひとつの時間が流れていることを、いつも心のどこかで感じていたい。そんなことを、いつの日か、自分のことにも伝えてゆけるだろうか。

大切なのは、いま自分には見えていない場所にも人や動物がいて、それぞれの価値観にしたがって生きていることを忘れないでいること。彼らへの想像力とか

共鳴する感性をもち続けること。目の前の、またはどこかの野原の花や虫もそれぞれに自分の時間を生きている、それに気づいてあげること、といっているようだ。

本を読む面白さは、新たな知識が得られることのように、本の中に出てくる言葉が読み手のなかにひびいてくるところにもある。この本の場合も、星野がアラスカの自然や動物、人びととの出会いのなかで発見する言葉や思考が私を刺激してくれる。

・アラスカの自然を旅していると、たとえ出会わなくても、いつもどこかにクマの存在を意識する。今の世の中でそれは何と贅沢なことだろう。クマの存在が、人間が忘れていた生物としての緊張感呼び起こしてくれるからだ。もしこの土地からクマが消え、野営の夜、何も怖れずに眠ることができたなら、それは何とつまらぬ自然なのだろう。

・寒いことが人の気持ちを暖めるんだ。離れていることが、人と人を近づけるんだ。

これは、彼がアラスカで自分の結婚パーティを開いたときに、友人が星野の日本から来た妻にかけた言葉である。

星野は、アラスカで多くの人たちと出会った。数種の先住民の古老や末裔、最果てのエスキモーの生業を見、彼らの歴史を聞きとり、書きとめている。こうした体験の幅の広さもこの本の魅力だ。

それから、アラスカの歴史のなかに日本人とのかかわりをみているところも興味深かった。

太古の昔、ベーリング海の海域が干あがってできた陸地（ベーリンジア）を通じてシベリアから人類（モンゴロイド）が移動してきた、そこがアラスカだったという歴史。もうひとつ、彼ら先住民の一部の種族の人たちについて、彼らの出自の謎を解くのに、星野が、江戸時代に海流に乗って流されてきた日本人の漂流民との関連をみている点だ。つまり、太平洋を漂流した

日本船がやがてアラスカや北米大陸の北部西岸に流れ着いたという公的記録があるらしく、それをもとに星野が想像するのは、漂着した日本人のなかにはアラスカに住み着いた者もいたのではないか。もしそうなら、先住民のなかに日本人の血が流れている人もいるのかもしれない。この想像は、この先何かに展開していくのだろうか。

また、一九〇〇年代初め、飢餓に襲われたエスキモーの人々を救った日本人がいたという。星野はこの日本人を知っているというエスキモーの息子に会いに行ったこともあった。

こんなふうに星野はアラスカの歴史に残る日本人の痕跡を訪ねることもしていて、それも興味深かった。ただ、私は彼の写真集をまだ見ていないので、主菜に手をつけていないような感じがしている。

\*フランク安田のこと。新田次郎の小説『アラスカ物語』の主人公。

## 水田とツバメ（二八）

佐藤ただし

### ・父の死

九月二四日に父は亡くなった。父はこの頃、殆ど寢室のベッドで横になっていた。いつも身体の右側を下にしていたのだが、二日くらい前から仰向けに寝るようになっていた。肺の機能が低下しているため、常時酸素吸入を行っているが、ベッドから起き上がった時、車椅子に移動したりすると、酸素の供給量が足りず、血液中の酸素濃度が下がり、唇が紫色に変色して苦しくなるので、時々パルスオキシメータという小型の機器で血液中の酸素量を測り、数値が下がると供給量を増やすようにしていた。ただ供給量を増やすと空気が鼻の中に強く流れ、それが不快なのかホースを

引つ張ったりマスクを外したりするため、目が離せなくなっていた。

この日は、午前中は母が父のそばに就いていたが、午後から母に代わって父のベッドのそばに椅子を置いて様子を見ていた。これまで父は自分の身体の具合について、痛いとか苦しいとか言わない人だったので、訪問看護の看護師は、「しようちさんは我慢強い人だね」とよく言っていた。

ベッドで休んでいる顔や姿は昨日と変わりないように見えたが、午後二時半頃になり、酸素濃度の数値が六〇%台まで下がり始め、供給量を最大にしても数値は上昇しなくなっていた。

父は毎月、月の初めに掛かり付けの病院に通院していたが、その前日に近所の床屋に行つて散髪するのが常だった。八月も予約した日に玄関前に車を横付けし、どうにか車の後部座席に座らせたのだが、自分の身体を支えて座っていることができず、シートに横になってしまった。これだと床屋へ連れて行つても髪を切ることができないだろうと思ひ、電話して予約を取り消し、翌週に家に来てもらうことにした。そして病

院へも電話をし、身体の状態を話して今月の通院を見合わせることにした。

数日後、病院へ行き担当の医師に会って今後のことについて話し合った。医師は肺のレントゲン写真のネガを見せ、肺の症状は末期的で、下半分がかるうじて機能している状態だと言った。そして身体の上部から腰に掛けて骨格の周りに殆ど脂肪が無くなってきていると言いい、暗に、死期が近いと言いたかったのかもされない。この総合病院に救急車で運ばれてきてから九年が経過していたが、その時から担当してくれている医師は、ここまでよく頑張ってきたと、傍に座っていた私の手を強く握った。そして通院はもう無理なので、訪問診療をしてくれる病院を探してくれ、その病院の診療に切り替えることになった。

訪問診療の最初の日は九月一六日で、その日は看護師と医師がやって来て、父を診察し、容体を確認し、次は一〇日後の二六日に来るということで帰って行った。

午後三時半になっていた。父は目をつむり仰向けに

なって呼吸を続けていた。顔の表情は変わっていないように見えたが、酸素量の数値は六〇％台から五〇％台になっていった。このまま病院に連絡せずに二六日の訪問診療の日まで待つか、同じ病院で週に一回来てくれていた訪問看護の看護師に連絡するか、躊躇したが連絡することにした。電話に出た看護師に状況を話すと、すぐに家に向かうと言ってくれた。

看護師は一五分ほどで家に到着した。そして「しよういちさーん」と父の名を呼びながら脈をとった。父は一度大きく息をしたが、その後は普通に息を吸い込むことができないのか、浅い呼吸を繰り返していた。ただ苦しそうな表情ではなかった。肺に病気を抱えている父の最後は水に溺れた時のように呼吸ができずに苦しむのではないかと心配していたが、実際は水槽の中の金魚のようにゆっくりと死に向かってゆくような感じに見えた。

看護師が先生に連絡しましょうと言いい、携帯電話を掛けたが、医師はここから離れた所において、到着するのには一時間以上かかるだろうということだった。

すでに脈は無くなっていたが、看護師が「先生が来

て判断するまでは、このままにしておきましょう」と言い、医師が来るのを待った。

その間、私は近くに住む弟に電話をしたり、こうなつた場合に備えて記録していた葬儀会社に電話をしたりしていたが、家で人が死ぬという事は、何か特別なことのように思っていた自分が、傍に看護師や家族がいるためか、妙に静かな気持ちのままなのが不思議だった。

一時間後の五時過ぎに医師は到着し、看護師から経過を聞き、父の体に手を当てて調べ死亡を確認した。時間は午後五時二七分だった。看護師が父の体の始末をしてくれ、その後医師と看護師は帰った。

その日は父の遺体をここに置くことにし、医師たちが帰つた後に来た葬儀会社の人にその処置をしてもらった。処置が終わつた後の父の顔を見ると、納棺師によつて整えられたためか、生きていた頃の表情が消え、静物的な顔になっていた。これが本来の顔なのかと、ふと思つた。

父が亡くなって二カ月が過ぎた。肺の病気で入院

し、その後、奇跡的に回復して退院してから九年の月日が過ぎていた。ここ一年程は布団の中で横になっている日が多くなつていたが、身体のことについて殆ど話をしなかつたため、死はまだ先のことと考えていたが、やはりいつかはこうなることは避けられないことだった。そして、家で亡くなったこともあつて、死の翌日から今日まで、生きていた頃と変わりなく時間が過ぎて行っているように思える。

仏壇の脇には水色のチュックのシャツを着た遺影が置かれている。無口で殆ど笑つた顔を思い出すことはできないが、その写真はどこか明るい顔をしていた。六〇才台の後半にクルーズ船に乗つて旅行に行った時に船のデッキで撮つた写真だそうで、母が持つていた写真の中から選んだ一枚だった。どこか生気があり、今もここで生きていような顔に見える。

● ブログ「陽だまりの中のなか」より

前田 勉

と、あとがきにある。  
生前の姉夫婦を詠んだ叔母の短歌28首と関連する画像を収め、今年他界した母と43年前に他界した父を悼む。

横山仁編集

『悼―叔母（渡辺静子）の歌より』

歌を読んで感じる叔母の心情や、出版した横山さんの気持がよく伝わってくる。

〈書肆えん〉から『悼―叔母（渡辺静子）の歌より』が届いた。

横山さんとは、お互いに20代前半のころ詩誌「匪」で出会って以来、何度かおじやましたりしていたこともあり、詠まれているご両親や横山さんのことも、当時〴〵の姿として思い巡らすことが出来、なおさら……。

「叔母（渡辺静子）の詠んだ歌から、両親に関係したものをおさめた。父は昭和五十四年（一九七九）七月十七日（法名記載されているが省略）、母は、ことし、令和四年

彼は、同人誌『海市』へ晩年の母を詩で書き続けている。今度は自分の詩で編まれたものが出されるのを期待したい。

（二〇二二）二月二日（同 省略）になくなった。

二〇二二年八月八日 納骨の日に

地方出版の仕事えらびし子の生を  
ようやく義兄は肯いにつけり

横山 仁

---

古い深きざしいるらし雑然と

物にかこまるる姉をさびしむ

編者 横山 仁

出版 書肆えん

発行日 2022・9・19日

悼  
——叔母（渡辺静子）の歌より



## 雑記 (26)

横山 仁

前号で紹介しようと思っていたが、ラクチン関係の記事が入ったので後回しになってしまった。

YouTube といえば、「結美大学」(小名木善行氏)がおもしろい。学校歴史(大分捏造があるようだ)ではない、ほんものの歴史をすることができるといえる。教科書にかいてあるようなことは、どうせんいわない。そんなものは教科書を見ればいい。特に、ゲーグル・アースを利用した、縄文時代以前の日本列島(日本という国号は7世紀からだか)の解説が興味深く、有料の講座をみたほか、『縄文文明 世界中の教科書から消された歴史の真実』(2022年4月11日、ピオ・マガジン)を買った。いちおうキヤッチコピーを紹介すると、「1

万7000年前に日本でおこった世界最古の文明。優れた建築技術と高度な生活水準。何より1万4000年という長い時代の間、武器を持たずに平和を貫いた。日本人の高い精神性は、縄文へつながる。やっぱりこの国はすごかった！！世界四大文明(メソポタミア・エジプト・インダス・黄河)よりも、1万3000年も前からあった縄文文明。数々の証拠が、驚異の事実を物語る。世界はなぜこれほどまでに「日本人のルーツ」を隠したがるのか？ その真相に迫る。」

縄文には興味があったが、それ以前もいろいろあったとは！

以下、同書による。

日本ではじめて旧石器(「世界最古の磨製石器」)を発見したのは、相沢忠洋氏(「岩宿」の発見 幻の旧石器を求めて)が講談社文庫にある)だが、これをももらったのが明治大学の杉原莊介という助教授で、杉原は、自分が発見したことにしたかったようだ。杉原は「文部省(現・文部科学省)で、岩宿遺跡での石器発見に関する記者会見を行うことになった」が、そ

の発表原稿に「相沢忠洋」という名前がない。

「芹沢（注、長介）氏は杉原助教授に原稿の訂正を申し入れました。しぶしぶ訂正された原稿は、発表時に『地元のアマチュア考古学者が収集した石器から、杉原助教教授が、旧石器を発見した』という表現になっていた。」

その後も「考古学の大家と呼ばれる人々から詐欺教師呼ばわりされる始末で、相沢氏はひどい迫害を受けてしまいます。」

「さらに（注、最初に石器を発見してから、21年後に吉川英治賞を受賞したことに加えて）、昭和天皇が相沢氏を大褒高く評価され、1989年（平成元年）に相沢氏に勲五等瑞宝章を授与されました。」<sup>1</sup>「そして不思議なことに、勲五等瑞宝章を授与されるその日（5月22日）の早朝、相沢氏は63歳という若さで脳内出血によって他界されました。きっと神々のもとに召されたのだと思います。」

そのほか、小名木善行氏には、『ねずさんと語る古事記 巻』（平成29年3月15日、青林堂）など多

数の日本史本のほか、『金融経済の裏側』（令和3年11月24日、青林堂）などがある。

\*

「mespesadoさんの大事な記事、見逃してしまいました。」というのは、「移ろうままに2」の「はぐらめい」さん（20220630 新・mespesadoさん講義（163）「一なるもの」 [mespesado 理論1]）。(<https://oshosina2.blog.ss-blog.jp/2022-06-30>)

（引用開始）

《今より精神性が高かったのではないかと言われている縄文時代には、別に「天皇」など居なかったのに、何万年も安定して続いたのは、実は彼らは「一なるもの」を中心に据えた思想を持っていたからではないか、と密かに思っています。》縄文以来の人類の精神史の中に「天皇」が位置付けられようとしています。それはまた、「東洋」vs「西洋」を止揚する可能性につながります。井筒俊彦の世界です（「ニセだらけの現実

世界→リアルな宗教的世界」<https://oshosina2.blog.ss-blog.jp/2021-03-07>。折しも昨日の記事を書いて、参政党を「靈性」レベルで考え始めたところ。今後の展開、ゾクゾクしながら待っています。「mespesadoさん講義(4) 井筒俊彦ワールドへ」<https://oshosina2.blog.ss-blog.jp/2019-12-14>)

\*

「秋田の詩祭 2022」で成田豊人さんの講演があった。そのときに、田中冬二の秋田に關係した詩があるときいたので紹介する。当日の配付資料にはない。

汽船

田中冬二

鍛冶屋の鞆の火が怖ろしかった  
大工の鑿がめずらしくて手を触れて傷をした  
前髪の長い女の子を美しいと思った  
越中へ汽船で帰る祖父と祖母を  
土崎の港に父と母と共に見送りした

廻船問屋で休んだが 別れを惜しみ  
祖父も祖母も父も母も皆よりかたまっていた  
祖父が私の掌に一枚の銀貨を握らせた  
父はそれを見ると 祖父に何か言って私に辞退させ  
た  
祖父も父も涙ぐんでいた

六十有余年の歳月は経った

北海の波の音と松籟をきくふるさとの整域に  
しずかに眠る 祖父よ 祖母よ 父よ 母よ  
——私も老いました

\*

以前廃仏毀釈についてふれたことがあるが、秋田での具体的な史料はほとんどないようだった。亀谷健樹さんの『太平洋四百年の風光』（平成22年3月10日、四海山太平洋寺）に記録があったので紹介する。

「一七七一年（正徳二年 壬辰） 太平寺（北秋田市上杉）が再建される。

金沢金山から現在地に移転開創された七十六年後の元禄十四年（一七〇一年）に焼失し、この年再建されたと伝える。その伽藍は、間口十一間、奥行九間の大伽藍であったとされ、焼失十二年目という早い復興と、伽藍規模の大きさから、いかなる外護（げご）があったのか興味もたれる。しかしこの大伽藍が、明治の廃仏毀釈に襲われ身売りされるという苦難を迎えることになる。

一八七三年（明治六年 癸酉） 太平寺（北秋田市上杉）が廃仏毀釈の影響で本堂を売却する。

廃仏毀釈の圧力により、寺院運営が困難になったことから売却されたもので、その後の再建は四十年を待つことになる。この売却された本堂は、いかだに組まれて米代川をさかのぼり、扇田の寿仙寺の本堂となるが、昭和五十年に焼失し、波乱の歴史をとじる。この前年には、同じ経緯で樹温寺（木戸石）の本堂が売却されていることから、この地域での廃仏毀釈運動の激

しさを知ることができるが、同時に他方においては本堂建立の要望があったことを物語り、廃仏毀釈の性格や地域差を立証するものといえよう。

一九一三年（大正二年 癸丑） 太平寺（北秋田市上杉）の本堂が建立される。

廃仏毀釈の嵐に襲われ伽藍維持が困難になったことから、明治六年（一八七三年）本堂が売却され、雌伏四十年、住職二代にわたる辛苦の末、この年現在に伝わる本堂が建立される。この地方では同じ町の樹温寺も同様の経緯で本堂を売却し、前年復興していることから、この地方における廃仏毀釈の激しさを後世に伝えるとともに、その後の四十年間における菩提寺復興に寄せる檀信徒の篤い心が伝わる思いがする。」

\*

以下、メスベさんより。（「放知技」）

（引用開始）

437 名前：mespesado

2022/09/26 (Mon) 17:54:39

一部で話題になっている、ワ〇チ〇で亡くなったピアニストの方のツイッター・アカウト↓  
<https://twitter.com/ChihiroARAI>  
と、副反応の実況中継とも言える発信をしてくれていいるゾロゾ↓  
<https://chihropiano.com/blog/covid19vaccination/>  
読んでいて痛々しいことこの上ないが、一般の、ワ〇チ〇について何の疑いも持っていない人の心境というのがよくわかる。酷い副反応が出て、ネットで対処法を検索するも、イベに到達することが無いのは一見驚くが、ネットに副反応のことを書く人の大半もワ〇チ〇に疑いを持たない人なのだろうから仕方ないことなのかもしれない。  
我々は、ともすると、ワ〇チ〇の害など判って当然。知らない人もちよつとゾグれば気付くだろうなどと暗に考えてしまうが、人間の認知のプロセスというのは、そのような単純なものではないのだろう。つく

づく考えさせられるな、と実感した。

(引用終わり)

「イベルメクチンは世界を変える『奇跡の存在』なのかも。…あるいは『そうなるはずだった』のかも」  
( In Deep さん <https://indep.jp/ascofuranone-is-miraculous/>) より。

(引用開始)

私は日本のポピュラー音楽に疎いので、違ったら申し訳ないですけれど、ASKAさんという方のゾグの記事です。こちらにあります。

この方は、定期的に病院で免疫年齢のチェックをしているようなのですが、イベルメクチンを飲み始めて(月に1回ほどだけ) 以来、  
「免疫年齢が100歳→40歳にアツツした」  
ことが、健康診断書の写真と共に投稿されているのです。

「免疫年齢のチェックってできるんだなあ」と初めて知りましたが、いくつかの病院のサイトを見てみしたら、T細胞やB細胞、NK細胞の数から、なんやかんやと20項目ほどについての数値が検査できるようです。

その免疫年齢の数値が「大幅に改善した」ということになると思われます。

まあ、このことについては、学術的な話でもないですので、あくまでひとつの話題ということに過ぎません。

しかし、先ほど書いたような抗ガン剤としてのイベルメクチン、あるいは、コロナ治療薬（抗ウイルス薬としての範疇になるはずです）としての可能性があると考えられているイベルメクチン、そして劇的な効果の駆虫薬としてのイベルメクチンの効能を思いますと、「飲んだだけで免疫が劇的に上がった」という話も、あながちあり得ないとも思えず、

「うーん…」

と思うしかなかったです。ちょっと先ほどのエ

ポックタイムズの記事でも、「イベルメクチンは腸内のビフィズス菌を増やし、腸内環境が改善される」とどが示されている過去の研究論文にもふれていたなどを思い出します。

(引用終わり)

\*

ワリンさん（「あなたの身体は食べ物で創られている」の「コロギいらん！」より。<https://ameblo.jp/amiraclehappens/entry-12768949528.html>

(引用開始)

2022年10月12日。

今、世界でも日本でも、不可解な事が起きています。

世界中の食料倉庫で火災や爆発が

相次いで起きたり、

日本の田んぼのため池の水が抜かれたり、

畜産農家の小屋が相次いで火事になったり、  
そんな年って、今までありましたか？

おかしいです。

おかしいですよ！

これって、

人為的なものではないですか？

(中略)



甲殻アレルギーがある人は、  
食べないでくださいね！

もうすでに沢山の製品が、  
市場に出回っています。

徳島大の非常食には、コオロギが入っているそうです。  
(大学シーズ研究所の「缶入りソトパン」の原材料

の表示写真省略)



▶ DJ Kazu さんのツイート。「コオロギ使ってるって言うけどさ、ゴキブリ(イラストあり)混せてないか？原型留めてないタイプのはバレないじゃん」

(引用終わり)

## あとがき

◆間近に見る菊は、放射状に黄色を放って気持ちのいい咲き具合になっていて、畑のその辺りを明るくしている。おひたしにして、シャキシャキした食感を楽しんだが、疲れ目や筋肉の疲れをやわらげる効能もあると知った。そういえば、最近、目の調子が……。(S)

◆2018年12月31日の“折々のことば”は、長田弘の詩の一節だが、続けて、死んだ人は「どこにもいない」のではなく、「どこにもゆかない」のだと長田の言葉を引用している。死んだ人は私の記憶の中にあって「年をとらない」とも。人も言葉もこころの中に保管され生きつづけるものだと思った。(T)

◆去年のタイヤ交換で、ナットが外れなくて難儀した話をB先生にしたところ、2つあるというので、電動のナット回し(デジタルインパクトレンチというらしい)をもらった。いつもは雪が降ってから交換していたが、今年は12月から雪というので、11月にタイヤ交換した。楽だ～。(J)

◆マイナンバーカードの賛否は別として、ポイント特典を機に電子決済、電子カードという言葉がより日常的になった。電子化が進んでいくこの先、高齢者は実生活の中でどう順応できるのだろうか。今は過渡期だと言った人がいる。その過渡期の中にいるスマホにもパソコンにも縁がない人たちは大いに戸惑っているに違いない。そう思いながら○年後の自分を想像すると、少し自信がない。(B)

---

「海市」第30号

2022年12月12日発行

発行 書肆えん

秋田市新屋松美町5-6 横山方